

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580139

研究課題名(和文) 民族誌から読み解く土器型式変化の理論的研究

 研究課題名(英文) Theoretical study on the Formation of Pottery Types seeing from
Ethnoarchaeological Research

研究代表者

高橋 龍三郎 (Takahashi, Ryuzaburo)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：80163301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：パプアニューギニアのイーストケープ地方およびセピック川流域における伝統的土器作りの製作者の聞き取り調査を通じて、土器型式の成立と型式の変革に関わる技術的要因と社会的メカニズムについて調査研究した。型式変遷の大きな原動力として、一部の主導的立場にある人の伝統的な世界観が他の製作者にも影響を与えている可能性が浮上した。土器型式は単に技術的側面だけで成立するのではなく、背後に土着信仰を含めて宗教的世界が大きく関わり、地域社会で共有される必要があり、それらの総合的文化・社会的脈絡のうちに成立し、変遷することが推察された。これは未開社会における理論的理解であり縄文式土器型式の研究にも重要な示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the the field research on domestic pottery makings in Papua New Guinea is to make clear and to get clues for building a theoretical framework from Ethoarchaeological field works on the hypothesis how Jomon pottery types could be formed and changed. During three seasons investigation, much attention have been paid to the interviewing the womens potters of the East Cape district and Kwoma tribe Potter in Sepik River as to the knowledge of technological system of pottery making as well as the world view which surrounded potters. In world View, including indigenous belief and religion, spirits world has crucial importance for the understanding of the potter's role in the local society. It has turned out that the leading persons have special influence and power on other potters in such a way that the pottery type could be controlled and changed by leading potter without any disagreements from other potters.

研究分野：先史考古学

キーワード：土器型式 民族誌調査 親族組織 パプアニューギニア 氏族 婚姻 トーテム 土器製作者

1. 研究開始当初の背景

縄文式土器の型式研究は、日本先史考古学のうちでも最大級の研究課題である。山内清男博士以来、100年近くの積み重ねがあり、全国で約1000余の土器型式が地方と年代を繋いで日本列島に展開したことが編年学的に解明されている。しかし、型式が成立し変遷する文化的、社会的背景とメカニズムは全く解明されていない。この課題は、土器型式から縄文社会を探る上で、誰もが必要と考えながらも、誰もが手をこまねいていた課題である。停滞の原因は、課題に対する適切な方法論を提示できなかった点にある。欧米では日本の縄文土器研究ほどの細密さはないものの、例えばフィリピンのカリガにおける土着的土器製作の民族誌調査が1990年代に実施され、大きな成果を収めていた(Longacre 1994)。そこで筆者は縄文時代と同程度の社会的発展段階にあるパプアニューギニアの家庭的土器製作に注目し、それらの土器型式が成立する社会的要因について調査した。土器製作をめぐる技術的交流が社会生活の様々な場面で起こり、諸種の意匠が混淆して多くの雑合形態が生まれ、さらにそれが型式として収斂する契機について観察し聞き取り調査を実施してきた。型式の成立と維持において最も重要で基礎的な背景を探ることの重要性に鑑み、社会的基盤である親族組織、氏族制度、婚姻制度、氏族とトーテムズムとの関わりから解明を試みた。その結果、母系制社会にあるイーストケープ地方では、土器製作の基本的技術は母から娘へ、さらに孫娘に継承されることが明らかになり、出自体系こそが伝統的技術が継承される直接の背景をなすこと、また婚姻を通じて製作者たる女性が移動する(夫方、父方)の範囲に技術が拡散し、その地域であらたな意匠の混淆が起こり、地理的範囲において斉一的な文様意匠が成立することを理論的に解明した。これは土器型式が成立する技術的側面が、地域の社会的基盤と強く結ばれていることを強く示すものであった。結局、型式の地理的分布を決定する因子も、地域の社会基盤をベースとした女性の諸活動の結果であることが理解された。

しかし、そこまでの研究では、土器型式が成立することの技術的、社会的要因を解明できたとしても、なぜ土器型式が変遷するのかの原因を解明できなかった。従来、縄文式土器の型式変化については、現代のファッション界のモデルチェンジを参考に、旧式に対する「飽き」と「モデルチェンジ」から説明する仮説があったが、十分な説得力をもっていない。それに代わる説明論理を別途に検討する必要が生じたのである。

2. 研究の目的

このような新たな研究課題を解明する上で注目したのは、2010年に偶然に聞き取り調査で遭遇したD女史の驚きの一言であった。

イーストケープ地方で一番の土器製作者との評価をもつD女史からの聞き取りでは、「土器を創作し変えるのは自分だ」との自信に溢れた発言があり、筆者らを驚かせた。土器型式の変革が、どのような人たちによって引き起こされ、どのような社会的背景を持つのかについては、今までの考古学では全く解明されていない。そもそも土器の型式変化とは広範な分布範囲における変動現象なので、一部の製作者ではなく地域全体の製作者が関わるとの漠然とした認識が一般的で支配的であった。したがってD女史の発言は少なからず大きな衝撃を与えるものであった。しかし、フィールドにおいて事実関係を調査すると、確かに彼女が新たに製作した土器が近隣のサブクランに分布し始めたことを確認した。なぜ、彼女がそのように豪語できるのか、また部分的であるにせよ、彼女の予告通りに彼女の創意工夫が地域社会で実現しつつあるのかについて改めて調査研究する必要が出てきたのである。縄文時代の土器型式が変遷する過程をフィールド調査で確認できる希な機会に遭遇したと思われるからである。

3. 研究の方法

D女史の土器改変が、どのような社会的背景を持つのか、またそれが実現するプロセスを解明する必要があること、さらに彼女を取り巻く他の氏族の女性たちが、それに追従し新たな土器を製作する経過を観察する必要がある。他の氏族に属する女性たちは十分に卓越した土器製作者であり、D女史の創意に従わなくても、自分の技術で日常の土器くらいは十分に製作できる能力があるにもかかわらず、なぜ彼女の意向に従おうとするのかを新たな課題として設定する必要がある。そこで、期間中に4回イーストケープおよびセピック川中流域を訪ねて、土器型式の成立要因と変革状況を確認しつつ、技術以外の領域で重要な意味を持つ社会的背景を解明するために現地調査を実施した。

筆者らは、D女史のもつ土器製作者以外の「顔」に注目した。彼女はイーストケープ地方一帯で最も勢力をもつBクランの一員である。Bクランは当地域では、精神世界に関するイベント(葬送儀礼等)において重要な存在意義をもっており、それゆえに最も発言力のある、そして有力な氏族である。彼女が豪語できる背景として、自らの出身氏族が地域社会で最も有力な氏族であることが関係していると想定されたので、Bクランのもつ精神世界について研究する必要が出てきた。3年間の調査の多くは、それに関する聞き取り調査と実態調査に費やした。

土器製作者と精神世界との関わり的重要性についてはイーストケープ地方だけでなく、セピック川中流域のクウォマ族においても確認する計画をたて、土器製作者の持つ精神世界との関わり、それが主体的製作者と周

辺的製作者にどのような相違と影響力をもつのかについて、クウォマ族の現地調査を通じてヤム儀礼との関わりで検討した。

4. 研究成果

イーストケープ地域で精神世界と関わる機会は、葬送儀礼や死後の世界との接触、先祖祭祀などである。解明の糸口は精神世界と関連する緑泥片岩製の石柱や石罫である。各世帯の敷地に隠れるように、ひっそりと樹立される石柱群 (*Gaima*) であり、それらの聴き取り調査では、前近代の「呪い」、「精霊」、「妖怪 (*Mimitua*)」が宿る呪物として機能し、時には魔術 (*sorcery*) の対象として存在していたことが明らかになった。しかも、今日においてもそのような呪物は日々の精神世界においても存命しており、死者の埋葬や葬送儀礼などと強く結びついている。D女史はこの地域でその領域の精神世界と最も深く結びついていると推察され、その事情についても聴き取り調査を進めた。特に死後の靈魂が帰る場所として、対岸に存在するノルマンビー島に渡海し現地を視察した。ノルマンビー島にはブウェブウェソ山 (*Mt. Bwebweso*) があり、死霊が帰る場所として、この地域一帯で信仰を集めていたからである。その山麓には緑泥片岩の原産地があり、そこから流れ出る *Bwasi Yai Yai* 川には無数の緑泥片岩が転石としてあることを確認した。イーストケープの世帯の敷地に樹立する石柱の原石は、実は海を越えて、はるばるノルマンビー島から運ばれた石であることが判明した。その事情から、死霊の帰る山であるブウェブウェソ山に産出する緑泥片岩をわざわざイーストケープに運び込む理由も理解されるのである。D女史の精神世界は伝統的な社会生活の中で、それらと関連して今日も生き続けていると推察されるのである。また彼女が製作する土器のうち、ピドラという器種は、口縁部直下に数段の輪積み痕を持つ独特の器形であるが、使用方や使用場所については中々D女史からも聞き取ることができなかった。筆者らは廃絶された墓場などの地表面にこの器種が多く散布していることを確認しており、その器種が葬送儀礼と深く関連していることを推察していた。土器製作者であるD女史はピドラの製作を通じて地域の葬送儀礼や先祖儀礼に深くコミットできる数少ない女性であると推察された。彼女の持つ伝統的世界観は、石柱や土器製作と強く結びついており、それが土器製作の場面でも強く反映していることが理解された。土器製作とは、単に技術的側面だけで成りたつのではなく、その使用を含めた精神的な脈絡の中で意味を持つものであることが理解される。したがってD女史が土器の変革について主導的立場を貫ける背景には、技術のみならず、実は精神世界との強い結びつきがあったからであり、また地域の女性たちがそれを熟知していたからであろう。

同様にセピック川中流域のクウォマ族における土器製作者の調査でも、アパウ、ワサウという儀礼用土器の製作に関われるのは、ノグイ階層というヤム儀礼の最高位の階層に属する男で、しかもクラワ・クランという一部の氏族に属するものだけであった。土器製作が単に技術だけでなく、儀礼や祭祀と密接に関連している姿をセピック川流域でも確認したのである。

イーストケープとセピック川流域での二地方で、土器製作が精神世界との関わりで製作使用されること、したがってその製作には最も呪力の強い人が選ばれる可能性が高いのである。おそらく日々の生活を通じて、その領域の知識に最も精通した人であることが推定されるのである。

翻って縄文時代の精製の儀礼用土器なども、製作使用に当たっては、その領域の知識に関してもっとも造詣深い専門家が製作したものと考えられるのである。例えば東北地方晩期の亀ヶ岡式土器の精製土器に見る多様な器種と華麗で過剰な装飾は、それらがほとんど日常的な煮炊きに使用されることなく、儀礼などの場所において使用され、そのまま廃棄される独特の特徴から、それらが儀礼、呪術、祭祀などの場で使われたことは明らかである。また土偶などの呪物と同じ装飾意匠と技術を持つことから、それらを製作すると同じ工人によって製作された可能性が高い。亀ヶ岡式土器の製作は特別の呪術、儀礼などの専門的知識を駆使して、葬送儀礼、先祖祭祀を司った人たちが担った可能性が極めて高いのである。

以上の通り、パプアニューギニアにおける土器製作の民族誌的調査の成果から、縄文式土器の製作に関する精神世界との密接な関係性を理論的に導き出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計7件)

高橋龍三郎・大網信良・平原信崇・山崎太郎

2017「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(14)」『史観』第176冊、pp.77-94

早稲田大学史学会 2017年3月

高橋龍三郎・根岸洋・平原信崇2016「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査

(13)」『史観』第175冊pp99-115、早稲田大学史学会 2016年9月

高橋龍三郎 2016「縄文後・晩期社会における

トーテムズムの可能性について」『古代』第138号 pp75-141 2016年3月 早稲田考古学

会

高橋龍三郎・大網信良・平原信崇・山崎太郎
2016「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(12)」『史観』第174冊pp98-119、早稲田大学史学会 2016年3月

高橋龍三郎 2016「縄文中期社会と諏訪野遺跡」『縄文中期の大環状集落を探る』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp13-20 2016年1月

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇 2015「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(11)」『史観』第172冊pp82-103、早稲田大学史学会

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇「パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(10)」『史観』第170冊 pp98-121 早稲田大学史学会 2014年3月

【学会発表】(計11件)

Ryuzaburo Takahashi 2017 “A Consideration of Totemism in Late-Latest Jomon Age from Archaeological Records”, SAA(Society for American Archaeologist) Vancouver.29th March.

Ryuzaburo TAKAHASHI 2016 “A Consideration on the Functions of Large Buildings of Late Jomon Age seeing from Ethnography of House Tambaran in the Middle Sepik River, PNG” Session T05: Case Studies in Ethnoarchaeology, WAC8-kyoto, 30th August

高橋龍三郎 2016「パプアニューギニアの民族誌調査と縄文文化研究」昭和女子大学特殊研究講座講演会 2016年6月29日

高橋龍三郎 2016「パネリスト発表ー加曾利貝塚の埋葬犬と縄文社会」『シンポジウム「縄文文化を世界から見る」』千葉市教育委員会 2016年2月27日

高橋龍三郎 2016「縄文中期社会と諏訪野遺跡」『縄文中期の大環状集落を探る』大宮ソニックシティホール 埼玉県埋蔵文化財調査事業団主催、埼玉県教育委員会共催 2016年1月17日

高橋龍三郎 2015「縄文社会の複雑化と民族誌 民族誌から見た社会の階層化、複雑化理論」国立歴史民俗博物館主催 第99回歴史博シンポジウム『縄文時代・文化・社会をどのように捉えるか?』 明治大学リバティタワー 2015年12月6日

高橋龍三郎 2015「縄文後・晩期の呪術社会と階層化過程」東アジア古代文化を考える会 池袋豊島区生活産業プラザ 11月14日

高橋龍三郎 2015年「民族誌と理論から探る下野谷遺跡の集落」西東京市教育委員会主催 下野谷遺跡国指定記念行事 早稲田大学ステップ22 2015年3月22日

高橋龍三郎 2014「民族誌と理論から探る縄文後・晩期社会」明治大学博物館 明治大学駿河台校舎 グローバルフロント 4031 教室 6月14日

高橋龍三郎 2014「台湾原住民およびメラネシア民族誌からみた縄文社会の階層化過程」第90回アジアセミナー 2014年7月

【図書】(計4件)

高橋龍三郎 2017「縄文社会の複雑化と民族誌」『縄文時代』吉川弘文館 2017年2月

高橋龍三郎 2015「霊(タマ)からカミへ、カミから神へ」『仏教文明と世俗秩序 国家・社会・聖地の形成』pp490-538 勉誠出版

高橋龍三郎「縄文社会の複雑化」『講座 日本の考古学4 縄文時代(下)』pp616-651 青木書店 2014年5月

高橋龍三郎他『縄文後・晩期社会の研究 千葉県印西市戸ノ内貝塚発掘調査報告書』早稲田大学考古学コース 総頁400 2014年4月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋龍三郎 (Ryuzaburo Takahashi)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 80163301

(2) 研究分担者

大網信良 (Shinryo Oami)
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号: 10706641

平原信崇 (Nobutaka Hirahara)
早稲田大学・會津八一記念博物館・助手
研究者番号：60731180